

【試し読み】

新天理図書館善本叢書

第24巻 奈良絵本集 2

(2019年2月刊行・八木書店)

解題

石川透・恋田知子・金光桂子

※本書の詳細は下記サイトをご参照ください。

<https://catalogue.books-yagi.co.jp/books/view/506>

※解題中の参考図版は非表示にしております。

『奈良絵本集二』
解題

石川 透
恋田 知子
金光 桂子

舟のゐとく

装訂 卷子装 二軸

表紙 鶯色地金繡模様

料紙 金泥下絵鳥の子紙

法量 表紙は縦三三・三 cm×横二四・九 cm。本紙上巻は三三・三 cm。全長一〇 m 六三・二 cm。二
十二紙。本紙下巻は三三・三 cm。全長九 m 五六・一 cm。十九紙。

外題 左肩に金泥横雲の貼題簽「舟のゐとく 上(下)」

内題 なし

字高 約二七・〇 cm

挿絵 上六図、下五図

印記 なし

書写年代 「江戸時代前期」写

(請求記号九一三・五一イ一五一)

「舟のゐとく」は、一般的には、「舟の威徳」と表記される。御伽草子に分類されているが、古写本は存在せず、その成立は江戸時代前期である可能性が大きい。したがって、仮名草子に分類した方が良くかもしれない。

本作品は、『室町時代物語大成』一一(一九八三年二月、角川書店)において、その本文が初めて翻刻紹介された。続いて、同年八月には、浜中修による「舟のゐとく」の形成」(『伝承文学研究』二九)が発表された。いずれも、本作品は天下の孤本として紹介されている。

その後、石川透「ポストン美術館蔵の絵巻について」(『むろまち』一〇、二〇〇六年三月)、大谷大「新出異本『舟の威徳』解題と翻刻」(『緑岡詞林』三三、二〇〇九年三月)により、ポストン美術館蔵本(以下ポストン本と称す)と個人蔵本(現石川透所蔵、以下石川本と称す)が紹介された。さらには、針本正行・山本岳史「國學院大學図書館所蔵『舟のゐとく』の解題と翻刻」(『國學院大學校史学術資産研究』二、二〇一〇年三月)により、新しく所蔵された國學院大學図書館本(以下國學院本と称す)が紹介され、現在は四伝本の存在が確認されている。本稿では、四伝本の比較を中心に、天理本の位置付けを行いたい。

最初に、本作品の内容を記すと、以下の通りである。

(上巻) 古来、国の宝、民の助けとなるものは舟である。特に、仏の教えが我が国に渡ったのも、舟の威徳によるものである。中国古代では、けんえん皇帝(黄帝)の時に、蚩尤^{しゅう}を討つために舟が作られた。その後、周の武王が殷の紂王を破った時も舟が使われている。一方、日本においては、崇神天皇の時に、臣下に舟に乗って伊勢の神鏡を捧ませている。

(下巻) 筑紫の伴狭手彦は、勅命により舟に乗って常世の国へ行き、橘の種を伝えた。また、雄略天皇の時、丹後の浦島太郎は、海上で会った美しい女の住む所へ舟で行き、夫婦となって幸せになっている。最も重要なのは、舟で仏典が渡来したことにより、聖徳太子が幼少から仏法修行できたことである。また、天武天皇は、危機に際して川舟に隠れ助かっている。さらには、大織冠鎌足は、姫君を唐の高宗皇帝に嫁がせ、三国無双の宝を送られている。こ

れらは全て舟の威徳によるものである。

以上の内容から、本作品は、いわゆる作り物語ではなく、中国と日本のさまざまな説話を集めて構成されていることがわかる。御伽草子に分類されている作品群は、元々本文の長い作品の一部を切り取って成立していることが多い。例えば、『源氏物語』を利用してできた『六条葵上物語』や、『平家物語』等を利用してできた『大原御幸の草子』等は、御伽草子の成立の仕方を示す端的な例である。

一方で、『蓬萊物語』『武家繁昌』や『宝くらべ』といった作品群は、一つのテーマで集めた説話集的な作品で、古写本が存在しないものばかりである。ということは、説話集的な『舟のりとく』も、内容的にはさほど古くにはさかのぼれない作品であると推測できる。时期的には、浅井了意が多くの仮名草子を、テーマ毎の説話を集めるかたちで創作していた時代であり、本作品も、浅井了意のような博識の人物が創作したものと考えられる。

『舟のりとく』の諸伝本は、天理本以外は以下の通りである。

國學院本	絵巻	二軸	〔江戸時代前期〕写	〔國學院大學校史学術資産研究〕二二
ポストン本	絵巻	二軸（現一軸）	〔江戸時代前期〕写	〔むろまち〕一〇〇
石川本	元奈良絵本	残欠	〔江戸時代前中期〕写	〔緑岡詞林〕三三三

以上の三伝本のうち、國學院本は、浦島太郎説話や仏法伝来説話等の本文の欠落が見られるものの、絵巻としての体裁はほぼ天理本と同じである。以下に記すように、その本文の内容や挿絵についても、酷似している。特に、詞書の筆跡が天理本と一致していることから、おそらくは、天理本と同時に、同じ制作グループにより制作されたと考えざるべきであろう。

ポストン本は、外題が残されており、後補の可能性もあるが、「ふねの始り」と題されていて、「舟のりとく」の別名と考えられる。ポストン美術館には、本来詞書を含めた絵巻であったものが、詞書のみ除去されてしまった作品が数点存在している。『ふねの始り』も詞書全てが存在していないが、絵画の内容から『舟のりとく』と同内容の作品であることが分かる。その体裁や描き方からして、天理本とほぼ同時期に制作された絵巻である。しかしながら、描かれた場面や内容については、かなりの差異が見られる。

石川本は、ポストン本とは逆に、詞書のみが残された奈良絵本の残帖である。縦型の奈良絵本としては一般的な形であり、奈良絵本に特徴的なちらし書きもいくつが存在していることから、本来は奈良絵本として制作され、後に挿絵や本文の一部を失ったものと考えられる。

それでは、詞書が残されている、天理本・國學院本・石川本の三本の本文比較をしてみよう。天理本との比較は、既に前掲大谷論文と針本・山本論文によって示されているが、例えば、石川本の冒頭と天理本・國學院本の相当部分を掲出すると、以下の通りである（句読点記号は私に付した）。

石川本

ふる雨の、草木をうるほすに、ことならず。爰に、しゆうといへる人あり。これは神農より七代、帝裏のちやくなんなり。然れども、そのをこなひ、人輪の法にあらず。

天理本

ふる雨の、草木をうるほすに、ことならず。爰に又、神農より、五代の末葉、帝明の孫、帝宣の末子に、蚩尤といへる、悪行の人あり。その身は堅石にして、頭はあか、ねにて、ひたひは、くろかねなり。朝夕の食物には、いさこをくび、石をのんて、身命をつく。これすなはち、山海の精の化して、今人間となりたる物なれば、山をつんさき、水をくゝる事は、いさゝか、ことゝもせざる、くせものなり。

國學院本

ふる雨の、草木をうるほすに、ことならず。爰にまた、神農より、五代の末葉、帝明の孫、帝宣の末子に、蚩尤といへる、悪行の人あり。その身は堅石にして、頭はあか、ねにて、ひたいは、鉄なり。朝夕の食物には、いさこをくひ、石をのんて、身命をつく。これすなはち、山海の精化して、今人間となりたるものなれば、山をつんさき、水をくゝる事は、いさゝか、事とせざる、くせものなり。

以上のように、天理本と國學院本は、ほぼ同じ本文を有することが分かる。一方、石川本は、他二本と近似した本文を有することもあれば、細かな表現が異なる所も目立つのである。このような関係が、比較できる限りでは、最後まで続くのである。天理本・國學院本と石川本との本文関係については、異本関係にあると言うことができよう。

それでは、天理本は、いつ誰が制作した絵巻なのであろうか。國學院本、ボストン本、石川本の存在から、天理本がたまたま一つだけ制作された作品ではないことが分かる。國學院本とボストン本は、天理本とほぼ同じタイプの絵巻であり、絵巻としても同内容のものが少なくとも三つは制作されたことになる。

残された絵画部分のみの比較や絵師の特定は、どのような絵巻でも簡単にできることではない。しかし、天理本に記された詞書本文の筆者については、現在かなり整理が進んでおり（石川透『奈良絵本・絵巻の生成』三弥井書店、二〇〇三年）、以下のようなことが分かるのである。

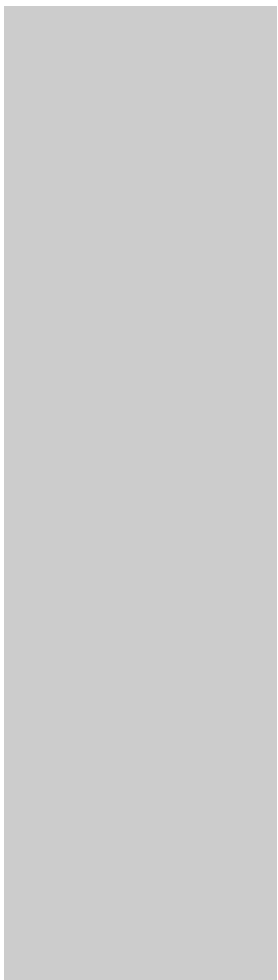
まず、天理本と國學院本の詞書の筆跡は一致している。その筆跡は、海北友雪が絵画部分を制作したとされる『源平盛衰記絵巻』『太平記絵巻』『舞の本絵巻』等の、江戸時代前期に制作された豪華絵巻群と同一なのである。これらの豪華絵巻群は、徳川御三家等の將軍家近縁の大名家が所蔵していた作品が多いことでも知られている。その豪華絵巻群に見られる詞書の筆跡と一致するということは、自ずと、天理本と國學院本もそれに準ずる大名家等が所蔵していた可能性が高い作品ということになる。

これらの江戸時代前期制作の絵巻は、その多くが当時の絵草紙屋によって制作された作品であると考えられる。ちなみに、本絵巻の詞書の筆者名は、現在までのところ、判明していない。同じ時代には、浅井了意や朝倉重賢のように、筆者名が判明している絵巻群も存在している。この兩名は元々は武士の血筋と考えられるので、本絵巻の筆者も、それに近い存在であったかもしれない。いずれにしても、これらの絵巻の詞書は、豪華絵巻の詞書の清書を行う職人（筆耕）として活動していた人物であろう。この筆跡の人物と朝倉重賢については、同じ題名のほぼ同じ絵巻が複数存在していることから、天理本・國學院本と同様な朝倉重賢筆の『舟のあとく』絵巻が、今後出現する可能性がある。

本絵巻の絵画部分については、簡単に制作者を明らかにできないが、その豪華かつ精緻な絵

からして、絵草紙屋に雇われた専門絵師であることは間違いない。一般的に、このような絵巻物には、署名や落款が記されることはないが、名前を残せる超一流の絵師ではないにしても、それに近い、土佐派や狩野派等で修練を積んだ人物であつたろう。詞書と違って絵画の制作には時間を要することから、工房のような組織の中での制作と考えた方が良いであろう。となると、代表する絵師がいたとしても、部分的には、その弟子が描いていてもおかしくはない。

なお、本絵巻の箱には貼紙があり（参考図版参照）、「詞書 飛鳥井雅章卿 土佐光成筆」とあり、詞書筆者を、江戸時代前期の公家である飛鳥井雅章（二六一―一六七九年）と鑑定しているが、これまでに知られている飛鳥井雅章の筆跡とは異なる。絵師とされている土佐光成（二六四七―一七二〇年）についても、光成には仮託されている作品が多く存在することから、容易には信じがたい。このような極め札は、およその制作時期は当てていても、首肯しがたいものが多いのである。



箱の貼紙

以上のことから、天理図書館蔵『舟のゐとく』は、江戸時代前期に、おそらくは名家等の注文を通して、絵草紙屋によって制作された優品であることが分かる。他に三伝本が現存しているが、唯一の全体を完備している絵巻であると考えられる。この天理本を中心として、本文と絵画を読解すると、これまで神楽場面と考えられてきた絵画（二四頁）は、天の岩戸の場面であろうことが分かる。まさに、今後の研究が待たれる伝本なのである。

（石川透）

常盤の嫗

装訂 卷子装 一軸

表紙 改装後補の金欄蔓草蝶藍色表紙。見返しは布目金紙。

料紙 鳥の子紙。金泥草木下絵。

法量 表紙は縦一九・〇cm×横二一・五cm。本紙は縦一九・一cm。全長一一m三〇・五cm。二十三紙。一紙の寸法は五〇cm前後。

外題等 題簽、外題、内題、奥書、識語等なし。

字高 約一六・五cm

書写年代 〔江戸時代前期〕写

(請求記号九一三・五一イ四三一)

本書は、夫に先立たれ無常を感じた常盤ときわの嫗うばが俄に発心して念仏の末に往生を遂げる発心往生のお伽草子である。嫗は念仏の合間にも、食への執着や子に対する不平不満を漏らしては、若くて華やかであった頃を追想するのであり、俗念や煩惱に満ちた念仏であったにも拘わらず、念願通り往生を遂げたとする。

滑稽味に溢れた七五調の文体で、繰り返し語られる物尽くしの描写には往来物との共通性が窺える。嫗が世の無常を語る場面(五七〜六〇頁)では、醜悪な肉体や虚妄の愛欲、地獄での呵責などが強調されるが、それらは『和漢朗詠集』や『往生要集』、蘇東坡『九相詩』の表現が踏まえられており、過去の自分を回想する場面(八八〜九二頁)には、『伊勢物語』や『源氏物語』からの引用も見てとれる。老いの練り言の中に、捨てきれない欲念や子どもとの関係性、老いの寂しさや若さへの執着など、老人の孤独な内面を生々しく描き出しており、お伽草子の中でも独自の世界を創出している。「浄土宗的思想を背景にした女人の発心往生の文学」⁽³⁾として、あるいは「古典や物の名の知識とともに「孝」を考えさせる教訓の書」⁽⁴⁾としての性格なども指摘されている。

現存する諸本は写本・版本ともに少なく、絵入りのものでは室町時代末期まで遡る柀型奈良絵本と江戸時代前期写の横型奈良絵本(ともに慶應義塾図書館蔵)⁽⁵⁾が知られている。その他、天理図書館蔵「国籍類書」(第二〇五冊)所収の写本や群書類従所収の刊本(底本不明)などがあり、加えて近年、富山市立図書館の山田孝雄文庫に「物ねかひのうは」と題した寛永五年(一六二八)の写本が存在することが明らかとなった。⁽⁶⁾なお、「国籍類書」は竹柏園旧蔵書の一つで、出雲・隠岐の領主堀尾忠晴の息女が伊勢亀山の石川家に嫁いだ際、嫁入り本として制作された可能性が指摘されており、本作品の性格や享受圏を考える上で重要である。このような諸本のうち、本書は現在のところ唯一の卷子本であり、先の奈良絵本二種との間に異同が認められ、独自の場面を描く点でも注目される。

まず、本書は奈良絵本二種に比して漢字を多用し、同筆で読み仮名を付す点に特徴がある。加えて、画中詞を多く記しており、細かな異同はあるものの、古態を示すとされる柀型奈良絵本のそれと共通する点でも注意される。そこには、子どもに対する恨みや食べ物への執着などを述べつつ念仏を唱える嫗とそれを聞く子どもたちの様子が面白おかしく描き込まれている。一方で、「子共か所は近ちかけれど、よふことなれば、南無阿陀佛あらさひしや悲しや、南無阿みた佛さげく、酒かなのまむ、あらこしいたや、ひさいたや、のとかわきや、南無阿弥陀佛く」(六七頁一二行

目（六八頁三行目）のように、榊型奈良絵本での画中詞（図版1▼参照）を、本絵巻では本文の順序を入れ替えながら詞書本文に入れ込むといった異同も見せる⁽⁸⁾。



図版1 慶應義塾図書館蔵『常盤の姫』
〔室町時代末期〕写、榊型奈良絵本 第1図

また、極楽往生の奇瑞の描写で、奈良絵本二種では「りんしゆにむかへはあらたなり」（榊型）とするのに対し、本絵巻では「りんしゆうしやうねんにして、紫雲^{しうん}まぢかくなひきて、おんかくそらにあらた也」（九八頁二行目末〜四行目）とするなど、全体的に奈良絵本二種に比して文意の取りやすい整った本文となっている。ただし、これら奈良絵本との異同箇所に関して、本書と底本不明の群書類従所収本の本文とは近似しており、両書においてなお精査の必要がある。

さらに、本絵巻における絵の特徴として、奈良絵本二種に比して、本文に忠実に濃彩で美しく描き込まれている点と独自の場面を有する点が挙げられる。本絵巻の各場面とそれに相当する奈良絵本二種の場面を示すと、以下のとおりである。

本絵巻	榊型奈良絵本	横型奈良絵本
第1図 荒れた屋敷で合掌する姫	第1図	第3図
第2図 仏間で鉦を叩く姫とそれを聞く子どもたち	第2図	第1図
第3図 仏間の姫の隣で語らう子どもたち	第3図	第2図
第4図 床に就き、苦しがる姫	第3・4図	第6図
第5図 杖をつく姥と囃す孫、室内の子ども		第4図
第6図 盥の水に映る自分を見て嘆く姫		第5図
第7図 室内で鏡を見て嘆く姫		
第8図 姫のもとに來迎する阿弥陀三尊	第5図	第7図

室内で鏡を見ながら老いた身を嘆く姫を描く第7図（八七頁）は、奈良絵本二種にはない本絵巻独自の挿絵である。「宵^{よひ}のか、みをけさみれば、老ほとつらきものあらし、過にし昔^{むかし}を思には、さなから夢^{ゆめ}の心ちして、ねられぬ夜半^{よは}の手枕^{たまくら}に、落涙^{おつるなみだ}そと、まらぬ」（九二頁三行目〜六行目）に相当し、姫の前に転がる手枕からも本文に即して描かれていることが見てとれよう。

また、本作品で姫が老いについて語る際、「小野^{おの}小町^{こまち}かおとろへしに、かわらぬうはか有様^{ありさま}よ」

(九三頁三・四行目)、「小野小町にあらねとも、みつからのへやおくらまし」(九七頁八・九行目)と、衰えた我が身を小野小町に重ねて嘆く場面が二箇所にわたって登場する。物語の展開や趣向においても、平安時代後期の『玉造小町壮衰書』との共通性が指摘されている⁽⁹⁾。往時の贅沢の限りと親兄弟の死によって零落した女が悲惨を極めた老境を語る『玉造小町壮衰書』は中世の小町像に影響を与えたことで知られるが、能「卒塔婆小町」やお伽草子『小町草紙』など、小町の老後の落魄は盛んに語られ、広く流布していた。その一端を表すように、奈良絵本二種では邸内で杖をつく姫を描くのに対し、屋外で孫たちに囃し立てられるようにして杖をつき歩く姿で描かれる本絵巻の姫には、たとえば東京大学総合図書館蔵『をのの小町』(小町草紙)において老い衰えて徘徊する小町の姿(図版2参照)とも重なるものがある。



図版2 東京大学総合図書館蔵『をのの小町』〔江戸時代前期〕写、奈良絵本

本絵巻の姫は白頭巾で在家尼であることを示しながらも、奈良絵本二種とは異なり、終始色鮮やかな美しい着物を纏った姿で描かれる。盥の水と鏡と二度にわたり我が身を嘆く姫を描くのと同様、本文で繰り返される姫の若さや美しさへの執着を表わすものであり、そこにもまた中世の小町像の投影が窺えるのではなからうか。

本作品は、物尽くしの趣向に加え、源氏や伊勢といった古典の教養をちりばめながら、当代の小町像⁽¹¹⁾を色濃く投影した姫を造型しており、沢井氏が指摘するように、女性への戒めとして、教訓の書として位置づけることができる⁽¹²⁾。本絵巻もまた、漢字を多用しつつ読み仮名を付す小絵⁽¹³⁾である点を勘案するならば、「国籍類書」がそうであったように、往来物的な側面や教訓的な性格により、嫁入り本として制作・享受された可能性も想定されよう。

(恋田知子)

【注】

- (1) 中塩清臣「常磐壚物語」の発生基層（『北海道学芸大学紀要』第一部（A・人文科学編）一六一―一、一九六五年八月）、坂巻理恵子「中世小説『常磐壚物語』の成立に就いて」（『人間文化研究年報』一六、一九九三年三月）参照。
- (2) 沢井耐三「『常盤の姥』―滑稽な不孝話―」（『室町物語研究―絵巻・絵本への文学的アプローチ―』三弥井書店、二〇一二年、初出二〇〇四年）参照。
- (3) 秋谷治「『常盤の姥』考」（『国語と国文学』五六―一二、一九七九年二月）参照。
- (4) 前掲注（2）沢井論文参照。
- (5) 慶應義塾大学メディアセンター・デジタルコレクションにて、いずれも全冊の画像を公開している。
- (6) 富山市立図書館山田孝雄文庫W九一三・四―モ―一五四五。国文学研究資料館・新日本古典籍総合データベースにて全冊画像公開。
- (7) 今西実「国籍類書本弁慶物語（翻刻）」（『山邊道』二八、一九八四年三月）参照。
- (8) 横型奈良絵本では、桝型奈良絵本と同じ順序で画中詞を詞書本文に入れ込んでいる。
- (9) 前掲注（1）坂巻論文参照。
- (10) 本作品には、骸骨の一生を描き、禅の思想を説く『幻中草打画』の本文との類似も見てとれるが、尼僧の俗なる執着を戒める描写にも共通性が認められ、両作品の享受圏が窺い知れる。恋田知子「尼と物語草子」（『国語と国文学』九二―五、二〇一五年五月）。
- (11) 中世の小町像を戒めとしてとらえる視点は、たとえば仮名草子の女訓物での小町の位置づけともあわせて考察する必要がある。勝又基「小野小町は貞女か―近世前期叢伝に見る小町像」（『国文学解釈と鑑賞』七〇―八、二〇〇五年八月）等参照。
- (12) 前掲注（2）沢井論文参照。
- (13) 通常の絵巻の天地の半分の大きさである小絵は、室町時代の公家や将軍家の子女の間で盛んに享受されており、諸本の少ない作品に多く見られる点でもごく限られた層での享受を窺わせる。メリッサ・マコーミック「小絵」再考―小型絵巻と個人的な絵画空間」（『お伽草子百花繚乱』笠間書院、二〇〇八年）等参照。

【附記】

貴重な資料の閲覧および図版掲載をご許可いただきました慶應義塾図書館、東京大学総合図書館に御礼を申し上げます。

小男の草子絵巻

装訂 卷子装 一軸

表紙 改装後補の芥子色雷文緞子表紙。見返しは金砂子を散らす。

料紙 鳥の子紙。裏打ちを施す。

法量 表紙は縦三四・四cm×横三三・二cm。本紙は縦三四・一cm。全長八二一・八cm。十六紙。

一紙の寸法は五三cm前後。

外題等 題簽、外題、内題、奥書、識語等なし。

字高 約三〇・二cm

箱書 桐箱には無記。桐箱を収める紙箱に「小おとこのそうし」と記す。

書写年代 〔室町時代末期〕写

(請求記号九一三・五―イ一四九)

『小男の草子』は、身の丈一尺ほどの主人公の恋の成就を描く物語である。極端に体の小さい男の成功譚といえ、渋川版御伽文庫に収められる『一寸法師』がよく知られるが、『小男の草子』はそれに先行する作品であった可能性が高い。また、同じく渋川版の一篇である『物くさ太郎』とは、細部に至るまで共通する要素の多いことが、夙に注目されている⁽¹⁾。

『小男の草子』の諸本には、最後まで主人公が小男のままであるもの(甲類)と、『一寸法師』と同様に物語の結末部で背丈が伸びるもの(乙類)と、二つのタイプがあり、本書は甲類に属する。甲類の中でも伝本によって細かい内容の違いはあるが、ひとまず本書の本文によって梗概を記しておく。

山城の国くろもとの郡に住む丈一尺の小男が、立身出世を志して上京するも、都では人々の好奇の視線にさらされ、清水山で松葉を掻くという賤しい仕事しか得られなかった。ある日小男は、清水寺に参詣する美しい上臈女房を見かけ、たちまち恋に落ちる。雇い主の助力により、大和言葉をしたためた恋文を女房に届けると、その文に感心した女房から、九日後に逢おうという旨の返事が来る。約束の日、初めて小男の姿を見た女房は、驚いて部屋に引きこもってしまうが、小男の詠んだ和歌に心を動かされる。部屋に入ろうとした小男は、勢い余って女房の琴を壊すという失態をおかすが、再び和歌を詠んで切り抜ける。二人は深く契りを結び、子宝にも恵まれて末長く栄え、後に小男は五条の天神、女房は聖観音として顕れた。

甲類に属する諸本は、さらに大きく三種に分けることができる。松本隆信氏による分類⁽²⁾に基づき、その後で紹介された伝本も加えて、一覧を示しておく。ただし、現在本文が公刊されているものに限定した。なお乙類の諸本については、次の『小男の草子絵巻 別本』の解題で紹介する。

(一)・高安六郎氏旧蔵 横型奈良絵本 一冊 (『新編稀書複製会叢書』一、『室町時代物語集』五、

『室町時代物語大成』四、新潮日本古典集成『御伽草子集』(以下、高安本)

・母利司朗氏蔵 横型奈良絵本 一冊 (母利司朗『小男の草子』の新出写本)『和漢語文研

究」八、二〇一〇年一月)

(二)・赤木文庫蔵 大型絵巻(元冊子本) 一軸 (『室町時代物語大成』四)(以下、赤木文庫本)

・本書Ⅱ天理図書館蔵 大型絵巻 一軸 (天理図書館善本叢書『古奈良絵本集』一、新日本古典文学大系『室町物語集』上)

・国文学研究資料館蔵(清水泰氏旧蔵) 小型絵巻 一軸 (『室町時代物語集』五)

(三)・天理図書館蔵 横型奈良絵本 一冊 (天理図書館善本叢書『古奈良絵本集』一)

・岩瀬文庫蔵 横型奈良絵本(「七くさ」と合冊) 一冊 (神道大系文学編二『中世神道物語』)

・白百合女子大学蔵(守屋孝蔵氏旧蔵) 横型奈良絵本 一冊 (『室町時代物語集』五、佐藤

信一ほか「翻刻」(白百合女子大学蔵)奈良絵本『小おとこ』『言語・文学研究論集』三、二〇〇三年三月)

本書は右の分類の第二类に属し、同類の伝本の中では特に赤木文庫本と本文が近似する。赤木文庫本は冊子本を改装した絵巻だが、『室町時代物語大成』の解題によれば、本書とは本文ばかりでなく絵の構図も類似することである。また両者とも、絵の中に人物の台詞や人物名が豊富に書き込まれているが、その画中詞にも一致するものが多い。画中詞において「とし久」という小男の本名を明らかにする(第八紙)のも、この二本のみである。³⁾ただし本書は物語後半になるとつれ画中詞が減少する傾向にあり、赤木文庫本では登場人物のせりふが書き込まれているところに画中詞がまったくなくなったり、大幅に省略されていたりすることがある(第九紙・第十紙・第十一紙・第十五紙)。なお徳田和夫氏は、本書と赤木文庫本の画中詞に『源氏物語』古注釈との関わりが見られることから、この系統の作者(筆者)像を、『源氏物語』に親しんだ公家や連歌師に想定している。⁴⁾

本書は冒頭と末尾を除くすべての料紙に大きく絵を描き、その余白に本文を書き込む形の絵巻である。緑青を使用した部分に傷みのあることは惜しまれるが、人物の着物や調度品、草花などが一つ一つ美しく彩られて描かれている。甲類諸本の中で最も制作年代が早いものは第一類の高安本と推定されているが、本書や赤木文庫本はそれに次いで古い伝本と見なされる。

さて、甲類の三種の本文を比較すると、第一類と他の二類との間の距離がやや大きい。松本氏は、第一類の諸本は叙述が著しく簡略で、特に小男や女房の心情描写が欠けていること等を、他の諸本との違いとして指摘した。⁵⁾その上で、和歌の相違などから第一類の方が古態を残していると推察しており、その見解はその後概ね支持されている。また、第三類は第二類よりさらに後出の本文と思われるが、これについては後掲『小おとこ』の解題で触れる。

ここで改めて本書の本文を第二類の代表として扱い、第一類の高安本と比べてみると、心情描写の精粗は確かに歴然としている。中でも顕著なのは、体が小さいことに起因する小男の劣等感の有無である。本書では、上京して京童たちの笑いにされた時、松葉搔きという不本意な仕事を与えられた時、上臈女房に恋をした時など折々につけて、小男が前世からの宿運を恨み、「わが身のほど」(第三紙)を嘆く描写が繰り返される。一方、高安本の小男は、出世の望みや恋の思いがかなわないことへの不満や悲しみを訴えはするものの、意外なほどにそれを己の身体的ハンディと結びつけることは少ない。高安本の本文からは、体の小ささをさほど気にすることなく欲するものを手に入れようとする、ややふてぶてしい主人公像が浮かび上がるのに対し、本書の主人公には己の運命に対する悲しみが横溢している。

第一類の本文を古態と見る説の根拠となる和歌の違いも、おそらくそのことと関係があるろう。上臈女房が小男の姿に驚いて引つ込んでしまった時に小男が詠む歌は、高安本には「三日月のほのかに見へていりぬるはそらやみとこそい^(ふ)うべかりけり」とある。女房が仮病をつかったことを踏まえ、「そら病み」に「空闇」を掛けたものである。一方、本書には、「夜もすがら^(障子)しやうじやりどをたゝくまにみねこがらすのなきわたるかな／あくるかどたゝく妻戸をあけもせで心のほかに夜こそあけぬれ」(第十二紙)と、まったく異なる二首の歌が見える。『小男の草子』を身分の低い者が己の知恵と才覚で成功する物語ととらえるならば、高安本のように機知に富んだ歌の方がふさわしく、そちらが古い形であることは首肯されるが、本書ではその歌を、より情緒的であわれを誘うようなものに改変している。

これに呼応するように、本書では女房の側の「なさけ」も強調されている。前段に挙げた小男の和歌を聞いた時、高安本の女房は「なりににも^(似)ぬうたのおもしろさよ」と興じる程度だが、本書では「たとひま^(魔縁)ん物のなりとも、かほどに色ふかくなさけあるものをば、いかでかむなしく返すべき」(第十三紙)と、小男の情に対して情で酬いるという姿勢を見せる。このような女房の対応はその後も繰り返し語られ、逢瀬の場面をより情趣深いものにしていく。一方で、小男の台詞の中には、「ただでさえ女性に罪深いものだから、私の思いを受け入れなければ極楽に行けませんよ」という趣旨の、女性への一種の教訓めいたものも見られる(第十三紙画詞)。

こうした特徴から察するに、本書が高安本のような本文から改変を経たものであるとすれば、それはより女性読者を意識したものであったのではなからうか。本書と極めて近い本文をもつ赤木文庫本の末尾には、「君が代は千世にやちよ^(マ)をさざれ石のいわおとなりてこけのむすまで」等、祝言の和歌が書き付けられており、嫁入り本として用いられた可能性が考えられることも、その推測を裏付けよう。

小男のあわれさを強調する傾向は、本書では絵においても指摘できる。他の『小男の草子』の絵本・絵巻と比べても、特に本書は主人公を相対的に小さく描こうとしているように思われる。それは、本作品の伝本の多くが横型の奈良絵本や小型の絵巻といった、縦寸の短い形態をとっている中で、本書(および赤木文庫本)が珍しく大型の本であることにもよるだろう。特に物語冒頭の図(第二紙)では、その大画面を利用して、小男の周りを大勢の京童たちが取り囲んで嘲笑するさまが描かれている。文字どおり衆人環視の中の小男は、無力であると同時に子どものように愛らしく、読者の同情を誘うに十分であろう(高安本にはそもそも、小男が都人から嘲弄されるという場面が本文中に存在しない)。

初めに『小男の草子』と『一寸法師』『物くさ太郎』との関係について触れたが、それらの主人公との関連性でいえば、高安本や、次に述べる乙類諸本に見られる、ややふてぶてしい主人公像の方がより近い。本書は、それとは異なる方向に変容した『小男の草子』の姿を伝えているのである。

(金光桂子)

【注】

(1) 市古貞次『中世小説の研究』(東京大学出版会、一九五五年)は、『小男の草子』『一寸法師』『物くさ太郎』を「庶民小説」の中の「求婚談・恋愛談」に分類する。また、佐竹昭広『下剋上の文学』(筑摩書房、一九六七年)は、「成り上がり」の物語として三作品の関係を論じている。

(2) 松本隆信『中世における本地物の研究』(汲古書院、一九九六年)および「増訂室町時代物語類現

存本簡明目録」(奈良絵本国際研究会議編『御伽草子の世界』三省堂、一九八二年)。『小男の草子』の諸本に関する先行研究として、ほかに小池清治「小男」「ひき人」と「一寸法師」―古奈良絵本・御伽草子の語彙―(『フェリス女学院大学紀要』一一、一九七六年四月)を参照した。

(3) 徳田和夫『古典講読 お伽草子』(岩波書店、二〇一四年)。

(4) 前掲注(3)著書。

(5) 前掲注(2)『中世における本地物の研究』。

小男の草子絵巻 別本

装訂 卷子装 一軸

表紙 改装後補の梔子色絹表紙。見返しは金箔を散らす。

料紙 鳥の子紙。裏打ちを施す。

法量 表紙は縦一六・七cm×横一三・一cm。本紙は縦一六・七cm。全長二三四・六cm。六紙。一紙の寸法は、第一紙四三・五cm、第二紙三四・八cm、第三紙二六・六cm、第四紙五一・六cm、第五紙五一・三cm、第六紙三六・八cm。

外題等 題簽、外題、内題等なし。

字高 約一五・〇cm

挿絵 七図

奥書 「ひろしまにてかきうつす也／慶長十二年ひつしの二月五日」

箱書 桐箱の蓋中央に「小男の草子」と墨書した紙箋を貼付。

書写年代 慶長十二年写

(請求記号九一三・五一イ一二九)

本書は、奥書によれば慶長十二年(二六〇七)に「ひろしま(安芸の広島か)で写されたという絵巻で、『小男の草子』の乙類に分類される伝本である。ほかに乙類の伝本として知られるのは、早稲田大学図書館所蔵の絵本(仮題『ひきう殿物語』。『室町時代物語集』五に所収。以下、早大本)のみである。この両本は、物語の結末部で主人公の背丈が伸びることのほか、主人公が地方から上京するのでなくはじめから都にいる点、主人公夫婦の本地を語らない点など、内容的に甲類とは少なからぬ異同があるため、改めて本書によって梗概を記しておく。

昔、九条殿に仕える「ひき人」(早大本「ひきう殿」と呼ばれる男がいた。身の丈は一尺五寸ながら、心は人よりすぐれた名人であった。ある時ひき人は、関白殿の屋敷で上野の局という女性を見そめて恋の病となり、事情を知った九条殿に勧められて恋文を贈る。上野の局は青柳(上野の局の侍女か)の口添えもあって返事をしたためる。ひき人が訪ねてゆくと、その姿に驚いた上野の局は、病を装って追いつ返そうとするが、ひき人の歌を聞いて招き入れる。その後、上野の局はひき人を昼は皮籠に入れて隠しつつ睦んでいたが、やがてそのことが関白殿に知られる。上野の局が清水寺に参籠して祈ると、打出の小槌を賜ってひき人の腰を打つという夢を見、ひき人は丈七尺余りに成長する。関白殿に見参したひき人は、その容姿と和歌の才を称えられ、筑紫の国を賜る。夫婦ともに所知入りして栄え、後には筑紫の大臣と呼ばれた。

打出の小槌が登場するところなど、明らかに『一寸法師』との関連が窺われる。『小男の草子』と『一寸法師』との先後関係については諸説あるが、一般的には、まず『小男の草子』の甲類から乙類のような変形が生まれ、それが『一寸法師』に影響を与えたと考えられている⁽¹⁾。また、主人公が貴人の前で和歌を披露する場面や、所領を賜って出世するという結末も、甲類には見られないものであるが、『物くさ太郎』はこれと同じ要素を含んでいる。『小男の草子』諸本の中で

は現存伝本の数こそ少ないものの、周辺の作品との関係を考える上では等閑視することのできない異本だといえよう。

乙類が甲類から派生したとする場合、そのもとになったのは、前掲『小男の草子絵巻』⁽²⁾ 解題に示した甲類諸本の分類の中では、第一類の本文だと推定されている。そのことを端的に示すのは、「みか月のほのかに見へてかくるゝはそらやみとこそいふべかりけれ」(第四紙)という、甲類では第一類の諸本にのみ存在する和歌が、乙類にも見られることである。

また、主人公が己の身体について特に劣等感を抱くことがないという点でも、乙類は甲類第一類に近い。早大本の冒頭部には主人公が京童たちに嘲笑される場面があるのだが(本書ではこの場面は省略されている)、そこでも我が身を悲観するような描写はない。そればかりか、例の「そらやみ」の歌の場面では、上野の局が仮病をつかって体よく追い払おうとしたことに「大きにはらわたて」、この歌を詠んだという記述もある。同じ場面で、甲類第一類(高安本)では「とりあへず」詠んだと記すのみなので、それと比べても、乙類の主人公は自負の念の強い人物として造型されている。ましてや、同じ局面で女のあわれみを乞うような歌を詠み、おとなしく引き下がろうとした甲類第二類の主人公(『小男の草子絵巻』⁽³⁾ 解題参照)とは、雲泥の差がある。こうした人物像の面でも乙類が甲類第一類を継承していることは明らかであるし、このような主人公のふてぶてしさ、逞しさはやはり、『物くさ太郎』や『一寸法師』との近さを窺わせる。

乙類の二本を比べると、物語のあらすじにおいては概ね一致しているが、文章量は本書の方が早大本よりはるかに少ない。これは、本書が早大本のような本文から一部省略し、抄出して作られた結果であることが明らかにされている。⁽³⁾ ただし、たとえば末尾の和歌披露の場面では、早大本の二首に対し本書には三首の和歌が見え、かつ本文も意味が通じやすいなど、必ずしも早大本の方が乙類の本来の本文を伝えているとは限らない。

本書はごく小型の絵巻で、赤・黄・茶など限られた色の絵具でもって比較的単純な構図の絵が描かれている。早大本⁽⁴⁾とは一部構図の似る絵柄もある(第一図・第二図)が、画風は相当に異なる。早大本はより多色を用いて細部まで丁寧に描き込む上、末尾には所知入りから大団円までを三面連続して描き、主人公の栄華を印象づけて物語を締め括っている。本書はそのような華やかさは持ち合わせないものの、素朴な画風には独特の味わいがある。

(金光桂子)

【注】

- (1) 佐竹昭広『下剋上の文学』(筑摩書房、一九六七年)、松本隆信『中世における本地物の研究』(汲古書院、一九九六年)。
- (2) 前掲注(1) 松本書。
- (3) 岩瀬博「小男の変貌―『小男の草子』から『一寸法師』へ―」(『大谷女子大國文』一三三、一九九三年三月)。
- (4) 早大本の画像は、早稲田大学図書館・古典籍総合データベースにて公開されている。

小おとこ

装訂 袋綴 一冊

表紙 打曇表紙

料紙 鳥の子紙

法量 縦一八・三 cm×横二五・七 cm

外題 表紙中央に朱題簽を貼付し「小おとこ」と墨書。

墨付 十四丁

行数 十五行（一部、十六行・十七行の丁あり）

字高 約一三・九 cm

挿絵 十一図（すべて半丁）

印記 「岡田眞之藏書」

書写年代 「江戸時代初期」写

（請求記号九一三・五一イ三〇九）

本書は、前掲の二点の絵巻と異なり、横型の絵本の形で伝わる『小男の草子』の一本である。本書の本文は、『小男の草子』諸本のうち甲類第三類に分類される（前掲『小男の草子絵巻』解題参照）。同じ分類に属する伝本としては、岩瀬文庫蔵本（以下、岩瀬文庫本）、白百合女子大学蔵本（以下、白百合本）の二本が確認できる。いずれも本書と同じく横型の奈良絵本であるが、制作時期は本書の方が他の二本より先行するかと思われる。

これらの本文は、先に紹介した『小男の草子絵巻』が属する甲類第二類と内容的に大差はなく、やや簡略化されている程度であるので、梗概は省略する。ただし先行研究でも指摘されるように、小男が障子を開けて女房の部屋に入ろうとする場面で琴を割ってしまうという叙述がないことは、甲類の中では第三類の独自性として注目される。その場面で小男が詠む歌「かずならぬわが身のほどのつらきかなことはりなれば物もいはれず」（十三丁裏）は、甲類の他の諸本とほぼ一致している。しかし、小男が琴を割ったという前提を欠く第三類の諸本の場合、この歌の眼目である「理」と「琴割り」の掛詞が成り立たないし、琴を壊されて不機嫌になった女房の心を和らげるほどの名歌だったという意味合いも薄くなる。

これが単なる脱落なのか意識的な省略なのかは判然としないが、あるいは、小男の振舞いから乱暴さを取り除くという意図はあったかもしれない。この場面で、甲類第二類の小男は、「おとこはかうなるこそよけれ」と考えて障子を広く開け、その結果琴を壊してしまうのだが、その部分（刪）も第三類の諸本では、「おとこはをこがましき（＝無遠慮なさま）こそよからん」（十三丁表）と、少しくニュアンスの異なる言葉が使われ、主人公の人物像に微妙な違いが生じている。いずれにせよ、第二類と同じく「そらやみ」の歌をもたない第三類の諸本は、「ことほり」の歌の機知まで失ったことにより、物語を平板なものにしてしまったという印象は否めない。

甲類第三類に属する三つの本を比べると、岩瀬文庫本と白百合本の近さに比して、やや本書のみ独自の本文が多い。その独自異文の中には第二類の本文に近似する部分もあり、概ね本書の方が古態を残しているといえそうだが、逆に本書の誤脱と思しき箇所も散見する。

この三つの本は、挿絵の挿入される位置も一致する場合が多い。（4）ただし、岩瀬文庫本・白百合

本の挿絵の数がそれぞれ五図であるのに対し、本書は倍以上の十一図を有する。さらに、岩瀬文庫本と白百合本は、同じ場面を描くだけでなく絵の構図まで酷似している場合があるのだが、本書の挿絵は少々異なる。たとえば、小男が女房のもとを訪れる場面(十二丁表)で、扇でなかば顔を隠しながら庭先にたたずむ小男の姿を描く点では三本とも共通する。しかし、本書では画面の左側に女房を、右側に小男を配置するのに対し、岩瀬文庫本・白百合本では左に男、右に女と、左右が逆転している。また、本書の挿絵の特色として指摘された「洛中洛外屏風図の類に見られる様なたれ幕を下げた町屋」の図(二丁裏・五丁表)は、他の二本には見られない。

なお、本書には挿絵と本文が同一の丁に書かれているところがある(五丁裏)ほか、次に挙げるような図柄には、『小男の草子』の現存最古本と目される高安本(甲類第一類)との類似性が指摘できる。

・会下傘をかついで上京する小男(一丁裏)⁽⁶⁾

・被衣を着た上臈女房と頭に包みを載せた供の女(五丁表)

・松葉を入れた籠を前後にかつぐ小男(五丁裏)

こうした特徴も他の二本には見られないもので、挿絵の面でも本書は古様を伝えているといえるようか。

一方、この三本の挿絵に共通する特徴は、主人公夫婦の幸福な生活を描く最終場面で、小男の姿がそれ以前の挿絵よりずっと大きく、女房たちと同程度の背丈で描かれていることである(十四丁表)。先に述べたように、甲類諸本には小男の背が伸びるといふ記述はないから、これは本文には書かれていない事柄が挿絵に描かれていることになる。乙類や『一寸法師』のような最後に主人公が大きくなるタイプの物語から影響を受けたためか、あるいは、結末のめでたさを完全無欠のものとして描くためには主人公を人並みの背丈にすることが必要と考えたのか、いずれにせよ興味深い現象である。

なお、本書の冒頭と末尾には遊紙のような紙が一丁分ずつ挟まっているが、これは本来表紙と貼り合わされて見返しとなるべき紙である。そのうち末尾の方には反故紙が使われており、次のような文章が記されている。

あるし申けるはよそ人ならぬ

御すかたとみまいらせ候はやく御な

のり候へうしわか殿はきこしめし

いまはなにをかつ、むへきうしわか

とはきこしめしいまはなにをか

この文章は、幸若舞曲『山中常盤』の後半で、牛若の行方をたずねて旅に出た常盤が山中の宿で盗賊に殺された後、同じ宿に泊まった牛若と宿の亭主との間で交わされた会話の一節と見られる。舞曲『山中常盤』は諸本間に少なからぬ本文異同があるが、その中で東京大学文学部国文学研究室蔵本(以下、東大本)および石川透氏蔵本(以下、石川本)の本文は、右の引用の四行目あたりまでほぼ一致する。ただし東大本・石川本では、四行目以降は「いまは何をかつ、むへき／うしわかとはわかことなり…」となっている。反故紙の五行目に見られる重複が書写時の目移りによつて生じたものであること、それゆえに反故とされたことがよくわかる。東大本・石川本はともに本書『小おとこ』と同じく横型の奈良絵本(ただし東大本は挿絵欠)である。この反故紙の存

在は、もう一点『山中常盤』の奈良絵本が、本書が制作されたのと同じ工房で作られていたことを示唆する。その意味で非常に貴重な資料である。

(金光桂子)

【注】

- (1) 松本隆信「増訂室町時代物語類現存本簡明目録」(奈良絵本国際研究会議編『御伽草子の世界』三省堂、一九八二年)に、守屋孝蔵氏蔵奈良絵本として挙げられるもの。両者が同一の本であることは、阿部美香「小男のさうし」解題(『岩瀬文庫蔵 奈良絵本・絵巻 解題図録』(慶應義塾大学DARC(奈良絵本)、二〇〇七年)に指摘がある。
- (2) 『物くさ太郎』にも、主人公が同じような状況で「ことほりなれば物もいはれず」と詠じる場面がある。
- (3) 前掲注(1)阿部解題。
- (4) 岩瀬文庫本の挿絵は、『特別展 絵ものがたりファンタジア』図録(西尾市岩瀬文庫、二〇〇七年)にカラー図版が収められている。また白百合本の画像は、白百合女子大学図書館HPの貴重書ライブラリーにて公開されている。
- (5) 天理図書館善本叢書『古奈良絵本集』一、岡見正雄解題(八木書店、一九七二年)。
- (6) 高安本に描かれた会下傘の意味については、黒田日出男「小男の持つシンボリックな傘」(『新日本古典文学大系月報』七、一九八九年七月)に詳しい。
- (7) 『山中常盤』諸本の本文について論じたものに、村上学「幸若舞曲原態への模索―「含状」―「山中常盤」を手がかりとして―」(吾郷寅之進編『幸若舞曲研究』一、三弥井書店、一九七九年)、信多純一「『山中常盤』について」(辻惟雄編『絵巻 山中常盤』、角川書店、一九八二年)等がある。

【附記】

貴重な資料の閲覧をご許可いただきました東京大学文学部国文学研究室ならびに西尾市岩瀬文庫、ご架蔵本のデータを提供くださいました石川透氏に、御礼申し上げます。